

# 「攝大乘論」の滅尽定におけるアラヤ識の存在 証明の、世親釈の諸訳の文の錯簡とその統一的 な修正のための論

真 田 英 範

## (一) 梵文における第一次錯簡と加筆

まず、諸訳の略称を示す。世親釈のうち、真諦訳を(真)、笈多共行矩等訳を(笈)、玄奘訳を(玄)、チベット訳を(T)、無性釈のうち、玄奘訳を(無)、チベット訳を(t)とする。(無)と(t)はよく対応する。次に示す第一次の錯簡と加筆は梵文にあったものとしてよい。理由は。(真)、(笈)、(玄)に共通して存在する(但し、(玄)では一部の加筆は特殊性を示す)からである。それは、中国で、三つの翻訳の文において、同じように錯簡と加筆があったのではなく、三人の翻訳者達が、梵文の誤りを知らずに訳したと思われるからだ。

又、(無)と(T)にその錯簡と加筆が見られないことはその錯簡と加筆の存在を傍証する。

以下における説明では、(笈)を中心に述べてページは大正藏經の三一巻による。

(錯簡)「二八二頁下段 如三世尊說 身行滅乃至言意行滅。於中身行者謂出入息 語言行者謂覺觀 意行者謂思惟及想等 如覺觀滅則語不得生 如是意行滅則意不得生 若汝言 如下身行滅住於定中 身得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>滅 如是意行雖<sub>レ</sub>滅 意猶<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>在。此義不<sub>レ</sub>然何以故 有<sub>二</sub>因緣<sub>一</sub>故 更有<sub>二</sub>別身行<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>身得<sub>二</sub>住<sub>一</sub>因。如三世尊說 由<sub>二</sub>飲食命根及識等<sub>一</sub>故 雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>出入息<sub>一</sub>身亦得<sub>レ</sub>住。意則不<sub>レ</sub>爾。更無<sub>二</sub>余意行所<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>故於<sub>二</sub>彼定中<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>意識<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>心住。如三世尊說 識不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>身 此說<sub>二</sub>果報識<sub>一</sub> 何以故 由<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>種子<sub>一</sub>故 後出定時生起識從<sub>レ</sub>此而生」この文は「次頁上段 以<sub>二</sub>彼方便心是善<sub>一</sub> 是故此定即与<sub>二</sub>善根<sub>一</sub>相応故。」の直後にあった文である。理由。(ア)定での不

「攝大乘論」の滅尽定におけるアラヤ識の存在証明の、世親釈の諸訳の文の錯簡とその統一的な修正のための論(真 田)

「撰大乘論」の減尺定におけるアラヤ識の存在証明の、世親釈の諸訳の文の錯簡とその統一的な修正のための論(真 田)

離身の識について、この文はアラヤ識とするが、前と後の文は意識の前提。(イ)定での心と心所について、この文は共減を

いうが、前後の文は共起とその破綻をいう。(ア)イはこの文と前後の文との断絶を示す。(ウ)これは正しい所では、減尺定におけるアラヤ識の証明の結論を示す文だった。(エ)この錯簡を正し次の加筆を除くと論と釈の順が合う。

(当錯簡に伴う加筆(一))「二八二頁下段 若汝言定及定方便……復次更有不<sub>レ</sub>成」この文のことである。理由。(ア)一次錯簡文とその前の文をつなぐ目的で加筆され、錯簡を正せば不要の文である。(イ)これは「次頁上段 若汝執言善心勢力……善根相応故」を正文とする粗暴なる借用である。その理由は。借用文の前半は「方便も定も並びに善心のみ生ず」という主張を否認する。後半は「方便では善心と善根が相応して生じるが、定では善心のみ生ず」という主張を否認する。後半の内容は正文と全く同じである。「汝言」は前後同一のはずだから、これは借用文の破綻と加筆を示す。

(当錯簡に伴う加筆(二))「二八二頁下段 此能依所依一切時……不<sub>レ</sub>能令<sub>二</sub>其相離<sub>一</sub>」この文のことである。理由。(ア)一次錯簡文と後の文をつなぐ目的で加筆されたが形のみの結合。(イ)これはすぐ次の能依所依共起の文の借用。

(当錯簡に伴う加筆(三))「二八三頁上段 經說減尺定中識不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>身……離<sub>二</sub>結後生<sub>二</sub>無<sub>二</sub>更生義<sub>一</sub>」この文のことである。理

由。(ア)減尺定における証明の結論として加筆された。(イ)これは二八二頁上段にある釈を正文とする借用の文。

なお、右加筆の(二)と(三)については、玄奘訳は特殊な形を示す。その説明は後述す。

## (二) 減尺定における証明の文の構成

無著の論は、減尺定における「識不離身」の識が意識でなくアラヤ識であることを、(一)出定 (二)定の本質 の二点より証明す。(一)は(1)心所のないこと (2)善等三性でない事より証明す。これは(無)と(T)により明らかである。世親の釈の梵文原本は右に従っていたはずであるが、インドにおいて(二)の(2)が(1)に吸収され補足となった。その時、減尺定における証明の全体の結論を示す第一次錯簡文が(二)の(1)の注釈のために移動され利用されたのである。その事により、加筆(三)が全体の結論を示すものとして加筆されたのである。又そのため、「二八三頁上段 若復執離<sub>二</sub>阿梨耶識<sub>一</sub>以<sub>二</sub>意識<sub>一</sub>故言<sub>二</sub>減尺定中有<sub>二</sub>心者<sub>一</sub>」これ以下の文は全くの繰り返しとして(二)の(2)の意味を失った。(笈)、(真)はインドにおける梵文の変化をそのまま訳したのである。

(玄)には右の変化の一層の徹底と原本の復活が見られる。それは玄奘の作為ではなく梵文によると思う。そこでは、第一次錯簡文の結論性が復活され、錯簡の位置のままでそこ

滅尽定の証明の結論が出たと見なされた。そうすると(笈)に見られる「加筆(二)以下加筆(三)に至る文全体」がそこに居られなくなり、先述の繰り返しの文の後半に移されたのである。ここで加筆(三)は結論文の重複を無くするために削除された。以上の事は「三三五頁下段 論日又此定中由<sub>レ</sub>意識故執<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>心者……不<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>理 積日已<sub>レ</sub>広<sub>レ</sub>廢<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>定有<sub>レ</sub>心。今当略頭<sub>三</sub>第二<sub>レ</sub>頌<sub>レ</sub>義」の文がよく示す。論となつてゐるのは無著の原文の復活である。第一次錯簡文はこの直前にある。略頭第二頌義の第二頌は(二)定の本質とその(2)からの証明を指す。補足は同し。

### (三) 第二次錯簡と加筆(各訳独自のもの)

(T)の場合(デルゲ版)。「一四〇b五行目 あたかもアラヤ識が無く……同七行目 転依を成就する。」これは「一三八b一行目 法の身は得ない」の後につく錯簡。次の「あたかもアラヤ意識によりて……(次行の)アラヤ識ではない」は加筆。又、「一四〇b七行目かくのごとくここに又……一四一a四行目 かくのごときは認めない。」これは加筆。「一三八b二行目より同五行目」の文を借用したものである。これは前述の錯簡と後の本文をつなぐために行われた加筆である。なお、(T)の北京版はデルゲ版の文章、語句と全く同じといつてよ。

(真)の場合。「一七五頁中段 論日云何知<sub>レ</sub>然 積日……何故不<sub>レ</sub>作<sub>三</sub>如<sub>レ</sub>此<sub>二</sub>說<sub>一</sub>」は加筆。すぐ後に同じ内容が重複す。この比喩は一七六頁下段の文からの借用。又、「一七七頁中段 何以故從<sub>三</sub>所依<sub>一</sub>……難具如<sub>三</sub>前<sub>二</sub>說<sub>一</sub>」は加筆。ここには必ず第一次錯簡文があるはずである。又、「一七六頁下段右 復次若汝言由<sub>三</sub>此定方便中<sub>一</sub>……有<sub>レ</sub>心無<sub>レ</sub>触<sub>等<sub>二</sub>者<sub>一</sub>是義不<sub>レ</sub>然」も加筆。理由。他訳に無く第一次錯簡と加筆(一)を知らずにそれを借用したもの。これは直前の「由<sub>三</sub>厭<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>心法<sub>一</sub>是故但<sub>レ</sub>拔<sub>三</sub>除<sub>レ</sub>心法<sub>一</sub>……是義不<sub>レ</sub>然」からの借用でもある。又、「一七六頁下段 論日有<sub>三</sub>譬<sub>レ</sub>喻<sub>一</sub>故」では、譬喩とは心・心所の共起であるはずなのに積は共滅の内容となり全く合つてない。又次の「論日如<sub>三</sub>非<sub>レ</sub>一切行<sub>一</sub>一切行不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>是故」の積の範囲が全く不明。積と論が全く合つてない。第一次錯簡を正し「次頁上段 何以故由<sub>三</sub>譬<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>故」以下の相当部分を当てるべきなのだ。</sub>

### (四) 原本に対する二積六訳の判定

無性と(T)の見た梵文世親釈が世親の原本に最も近い。次に(笈)、(真)が近く(玄)は最も遠い。

(県立小田原城内高等学校教諭)

「撰大乘論」の滅尽定におけるアラヤ識の存在証明の、世親の諸訳の文の錯簡とその統一的な修正のための論(真 田)